

家庭科の研究

高松 有子



🔍 キーワード

工夫を選択決定するための視点 視点の顕在化 判断する

📌 主張

本研究では、課題を解決するための工夫を選択・決定する視点の顕在化に着目した。

自分や家族の生活課題を見つめながら知識・技能を習得する中で、知識・技能が内包する「健康」「環境」「福祉」「伝統」等につながる内容が見出される。知識・技能を生かして生活課題を解決しようとするとき、自分や家族の生活の仕方や解決方法を含んだ資料を検討することで、何を大事にするか判断する視点を絞り込んで顕在化する。顕在化した視点からどの工夫を自分や家族の生活に取り入れるかを判断する中で、子どもは、それまでの「生活の仕方に対する見方」を更新し、「よりよい家族の生活を実現する工夫」を再構成する。このような学びを通して、自分と家族の生活を見つめて、よりよい生活の仕方を工夫する子どもはぐくみたいと考えた。

I 自分と家族の生活を見つめ、 よりよい生活の仕方を判断する子どもを育てる家庭科

1. 家庭科で求める子ども

求める子ども

自分と家族の生活を見つめ、よりよい生活の仕方を判断する子ども

「意欲・態度」

家族とのかかわりの中で自分自身の高まりを実感し、家庭での実践に向かおうとする。

「中核となる学力」

生活の基礎的な知識・技能を、家族(人)や生活にある「もの」「こと」に関係づけて考える力

家庭科では、「自分と家族の生活を見つめ、よりよい生活の仕方を判断する子ども」を目指す。自分や家族の生活の課題の解決に向かって、「健康」「環境」「福祉」「伝統」等につながる内容を取り入れて工夫し、自分や家族に合った方法を選択決定する子どもである。

新学習指導要領では、家庭生活と家族を重視し実践力を育成する視点から改善が図られている。家庭や社会の状況が多様化する中で、子どもが一般的な知識・技能を自分の生活に生かしていくためには、学習内容を自分や家族の生活場面においてとらえ、実践場面や内容、方法を自分や家族とのかかわりで判断できることが大切である。

本研究では、工夫を選択・決定するための視点の顕在化に着目した。課題解決のために考えた工夫の仕方のよさを検討するために、自分は何を大切にすることを決定する。よりどころとなる視点をもって判断することで、内容や方法に見通しができ、子どもは家庭での実践に意欲的に向かうことができるのである。

知識・技能を自分の生活と関わらせながら習得する中で、「健康」「環境」「福祉」「伝統」等につながる、生活をよくする内容や方法が見出される。知識・技能を自分と家族の生活に生かそうとすると、自分と家族の生活に関係づけることで判断する視点を顕在化する。顕在化した視点からの工夫を自分や家族の生活に取り入れるかを判断する中で、子どもは、「生活の仕方に対する見方」を更新し、「よりよい家族の生活を実現する工夫」を再構成する。このような学びを通して、自分と家族の生活を見つめて、よりよい生活の仕方を判断する子どもをはぐくみたいと考えた。

2. カリキュラム改善の視点

(1) 単元配列の工夫

「自分と家族の生活を見つめて、よりよい生活の仕方を判断する子ども」を具現していくために、内容(1)「家庭生活に関心をもって、家庭の仕事や家族との触れ合いができるようにする。」を中心にした単元を重点単元として年間を通して配列する。(1)を中心にした重点単元で家族との思いや願いの交流を積み重ねることによって、はじめは自分の視点から工夫していた子どもが、次第に家族の思いや願いにも目を向けていけるようになると思える。

(2) カリキュラムの段階性

小学校家庭科及び中学校技術家庭科(家庭分野)では、よりよい生活の仕方を意思決定する力を段階的に高めていくことにより、子どもは、家庭実践への意欲をもつことができると考えた。

<よりよい生活の仕方を選択決定する力の段階的高まり>

<p>小学校5年 内容を自分や家族の生活に関係づけ、生活課題の解決に生かす方法を選択決定する。</p>	<p>小学校6年 内容を自分や家族の生活に関係づけ、生活課題の解決に生かす方法を多面的に検討し、選択決定する。</p>	<p>中学校 内容を自分や家族の生活に関係づけ、生活課題の解決に生かす方法を社会や未来につながる視点から多面的に検討し、創造する。</p>
---	---	---

3. 授業改善の方策

<求める家庭科の学びを具現するための学習過程>

<追求の足場をつくる過程>

<p>・教材と出会い、そこに含まれる知識や技能と自分や家族の生活の課題について交流する。</p> <p>・教材について調べ、題材にふくまれる知識・技能の価値について交流する。</p> <p style="text-align: center;">生活の中での知識・技能の価値の明確化</p> <p>◎教材の価値を自分や家族の生活で生かせるようにするにはどうすればいいだろうか。</p> <p>・実験・実習</p> <p style="text-align: center;">足場となる知識・技能の獲得，見方の高まり</p>	<p style="text-align: center;"><教師の働きかけ></p> <p>○教材に含まれる知識・技能と生活の課題を話し合う活動の組織</p> <p>○教材に含まれる知識・技能の価値を調べ・交流して，教材の価値としての視点を明確にする話し合い活動の組織</p> <p>○できるようになる方法を話し合う活動の組織</p> <p>○知識・技能を獲得するための実習</p>
--	---

<納得のいくわかりを生む過程>

<p>・自分や家族の課題に合うようにするために，方法を見直し，工夫する。</p> <p>◎問題をよりよく解決する方法を決めるには，どの視点を大事にすればいいだろうか</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p style="text-align: center;">工夫の検討</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;">工夫</div> </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p style="text-align: center;">自分と家族の生活に関係づけて判断する視点の顕在化</p> </div> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;">判断</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;">生活の仕方に対する見方の更新</div> </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p style="text-align: center;">よりよい家族の生活を実現する工夫の再構成</p> </div> <p style="text-align: center;">家庭実践</p> </div>	<p>○自分の課題を解決する工夫をカードに書く場の設定</p> <p>○教材の価値としての視点の中でどの視点が家族の生活にとって大切か話し合う活動の組織</p> <p>○顕在化した視点から自分の工夫を仲間と検討する活動の組織</p> <p>・実践計画の作成や作品制作</p>
--	---

<納得のいくわかりができたよさを自覚する過程>

<p>実践を振り返り，生活をよりよくするための自分の工夫の価値を実感する。</p> <p>◎この学習を通して，自分はどんなことができるようになっただろうか</p> <p>↓</p> <p>単元の学習を通しての自分の思考力の高まりを見出し，家庭での実践を継続する意欲をもつ。</p>	<p>○自分の工夫や自分の生活の価値を実感するために，家庭実践を振り返り発表する場の設定</p> <p>○ポートフォリオを振り返り，本単元でできるようになったことを表に整理して書き出して，自分の高まりを実感する場の設定</p>
--	---

4. 評価法

ポートフォリオの蓄積と振り返りとを組み合わせる評価を行う。

学習の記録をポートフォリオとして集積し，知識・技能，創造的な力，実践への意欲がどのように成長したかを，自己評価させる。この自己評価から，家族とのかかわりから自分を見つめ，家庭生活をよりよくしていく新たな認識に向かう子どもの思考の高まりを評価する。

II 実践

第5学年

「針と糸で、家族が使える小物を作ろう」

1. 自分が作る小物の作り方と、家族の生活の仕方や好みをつないで、家族のための工夫で便利な小物の工夫を再構成していく学び

本単元では、針と糸を使った家族の生活を楽しく便利にする小物づくりを取り上げた。本単元は、家庭科学習の入門期に位置し、家庭科におけるものづくりの学習の最初の学習となる。自分の手でものを作り上げることの楽しさや、手作りのものの温かみを感じ取らせることができる。使う用具の針と糸は、古来より身近に使われ生活を便利にしてきた道具であることを感じ取らせたい。

本単元では、家族が使える小物を検討する視点の顕在化に着目した。針と糸の使い方の知識・技能を自分が家族に作りたい小物と関わらせながら習得する中で、「機能性」と小物の内容や作り方が見出される。針と糸の使い方の知識・技能を使って家族のための小物を工夫して作ろうとするとき、何を大切に工夫すればよいかを話し合うことで、自分と家族の生活に関係づけて判断する視点を顕在化する。顕在化した視点からどの工夫を自分や家族の生活に取り入れるかを判断する中で、子どもは、「家族のための小物に対する見方」を更新し、「家族のための小物の工夫」を再構成する。このような学びを通して、自分と家族の生活を見つめて、よりよい生活の仕方を工夫する子どもをはぐくみたいと考えた。

2. 単元の構想

(1) 単元の目標

家族のための価値ある小物を作るには、家族の思いだけでなく機能性や家族の嗜好にあうように作ることが大切なことに気づき、家族が使える小物を作ることができる。

(2) 追求の構想 (全9時間)

1次 (3時間) 針と糸ってすごいな

- ① 針と糸を使ってどんなことができそうか、考えよう。
家ではどんなところで針と糸が使われているだろうか。
- ② ◎針と糸について調べよう。
- ③ 針と糸の使い方を練習しよう。
・家族のために、便利に使える小物を作りたいな。

- ・針と糸を使った作品の提示
- 家族が使う小物を作るには、どんな知識や技能があれば課題が解決できそうかを明らかにする話し合い活動と調べ活動の組織
- 針と糸の使い方を練習する場の設定

2次 (5時間) 針と糸を使って作品を作ろう

- ④ 家族のための小物を作ろう
- ⑤ 家族が使う小物の工夫で、大切なことはなんだろうか。
- ⑥ ◎自分の工夫にどの視点(大切なこと)を取り入れると家族にとって価値ある小物になるだろうか。
- ⑦ 家族の立場にたって、工夫を見直そう。
- ⑧ 家族のための小物を完成させよう。

- 工夫を検討する視点を仲間と話し合う活動の組織
- 工夫を検討する場の設定
- わかったことを話し合う活動の組織
- 自分の工夫を見直す場の設定
- 作品製作の場の設定

3次 (1時間) 実践を振り返ろう

- ⑨ 今までの実践を振り返ろう。
ポートフォリオをもとに、自分の成長を確かめよう。

- 今までの実践の振り返りを交流する場の設定
- ・自分の成長をカードに書き込む。

3. 授業の実際

(1) 針と糸ってすごいな

自分の生活への感じ方を明確にもち、仲間とかかわりながら追求していこうとする子どもたち。裁縫道具を手にして、「早く使ってみたい。」と、針と糸を使う学習を楽しみにしていた。そんな子どもたちに、針と糸で作った作品例を提示した。子どもたちは、作品例のポケットティッシュケースを手にとり、「どうやって作るんだろう。」「きれい。わたしもこんなふうに見えるようになりたいな。」と、教師に話しかけてきた。作品例を見た後の感想を発表する場では、次のような発言が続いた。



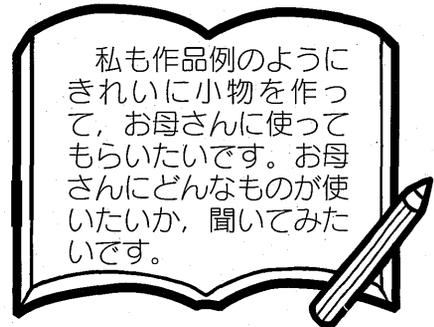
ティッシュケースがとてもきれいに作ってあって、大きさもぴったりで、使いやすそう。私も、こういうふうに見えるようになりたいな。

針と糸が使えるようになると、小物を作るほかにも生活に役立ちそう。



自分で作ると、心が通じる。家族にも小物を作ってあげたり、普段の生活の中で役立ててあげたりしたいな。

話し合いの後、良美さんは、右のようにノートに記述した。子どもたちは、針と糸が使えるようになって、自分や家族の生活に生かしたいと願ってきている。そこで、生活の中で、針と糸がどのように生かされており、家族は自分が針と糸が使えるようになることをどのように考えているかについて調べ、話し合う活動を組織した。



私も作品例のようにきれいに小物を作って、お母さんに使ってもらいたいです。お母さんにどんなものが使いたいか、聞いてみたいです。

<良美さんのノート>



私の家では、針と糸はお母さんがボタンつけに使うことが多い。今までは何か意識しているとは思っていなかったけれど、聞いてみると、今度は取れませんよんという気持ちを込めてやっているそうです。お母さんってすごいと思いました。

私の家にある針と糸で作ったキッチンミトンは、すごく身近にあって役に立っているし、心がこもっているから、使っていてとてもうれしい気持ちになります。わたしも家族にそんなふうに使ってもらえるものを作りたいので、針と糸できれいに作る縫い方を練習したいです。



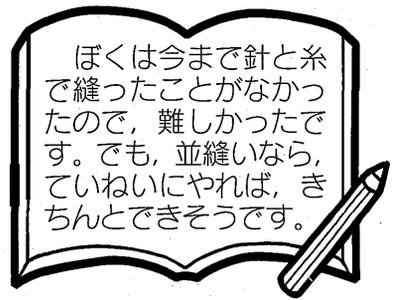
自分で身の回りのことができるようになることは、とても大切。大人への第1歩だねって家族は言ってくれたよ。



自分の生活の中での針と糸の使われ方と家族の思いを関係づけてとらえ、技能を習得する意欲をもってきた姿である。そこで、針と糸の基本的な使い方を練習布で練習する場を設定し、それを活用して家族に使ってもらう小物を作ることにした。

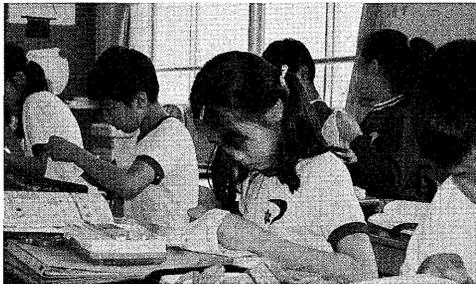
子どもたちは、並縫い、半返し縫い、本返し縫いの3つの縫い方を試してみても、「並縫いは、早く縫える。本返し縫いは、とても丈夫に作れそう。」と熱心に縫い方の練習に取り組んだ。時間の終わりに和夫さんは、ノートに右のように記入した。

針と糸の使い方を練習し、それを活用して家族のための小物を作りたいと願ってきた。そして、作る小物とそれを使ってもらう家族とを決め、技能の活用の仕方に見通しををもち始めて



ぼくは今まで針と糸で縫ったことがなかったので、難しかったです。でも、並縫いなら、ていねいにやれば、きちんとできそうです。

<和夫さんのノート>



縫い方の練習をする良美さん

いる状況である。良美さんは、本返し縫いの丈夫さと、一針一針縫っていくことに心を込めることができそうと考え、自分が作るきんちゃく袋の作り方や手順に見通しをもってきている。子どもたちは、針と糸で小物を作るための知識・技能や家族に使ってもらう小物の見方を高めてきた。そこで、家族のための小物作りの活動に移ることにした。

(2) 自分の工夫を見直そう

家族のための小物の完成が間近になったので、教師が「家族に使ってもらうための工夫はしっかりできましたか。」と問いかけると、「自分で考えた工夫だけど、仲間の意見も聞きたい。」という発言が出た。他の子どもたちもその考えに賛成したので、家族のための工夫について話し合う活動を組織した。子どもたちは、次のように発言した。



私はやっぱり家族の好みが一番大切だと思う。好きな色や柄を使うと、自分のお気に入りだから、自然にいい気持ちになるんじゃないかな。

ぼくは丈夫さが一番と思う。でも、ていねいにして見た目をきれいにするのも大切だ。どちらを大切にするかで違いが出そう。どちらを大切にすればいいか、はっきりさせたい。



これらの発表の内容を整理すると、「家族の好み」「便利さ」「丈夫さ」「見た目のきれいさ」の視点がはっきりしてきた。他の子どもたちも、自分はどの視点が大切か、問題にしてきた。そこで、追求問題を「◎自分の小物の工夫を考えて、大切なことをはっきりさせよう」とし、これらの中から自分が大切にしたい視点を選んで、そこから自分の小物の工夫を検討する場を設定した。

子どもたちは、4つの視点から工夫を考え、カードに記入し、その後の振り返りで、「工夫することがたくさんできてきた。やることがたくさんで、大変そう。」「使いやすいようにする工夫が3つも出てきた。」と、書いてきた。さらに、振り返りを交流する場面では、「やっぱり、自分と使う家族は違う。自分の考えで工夫をしたら家族に悪い。もっと使う人のことを考えたほうがいい。」という発言が出てきて、賛成する意見が続いた。

これは、工夫が多く見つけてどの工夫を使えばいいか絞りきれないでいる状況である。そこで、使う人の立場にたって大事にすること(視点)を話し合う活動を組織した(視点の顕在化)。



使う家族の気持ちが大切だ!



使いやすいを考えないと。



家族の生活の仕方も大切だと思うよ。

この話し合いから、追求問題を「◎自分の小物の工夫を家族の気持ち・使いやすさ・生活の仕方から考えて、大切なことをはっきりさせよう」とし、前時に考えた工夫を、さらにこの視点から選んで検討する場を設定した。

しかし、それまでも家族のために制作し、工夫してきたという意識で学習を進めてきた子どもは多かった。そのような意識の子どもにとっては、「家族の好み」「便利さ」「丈夫さ」「見た目のきれいさ」の視点で検討したことを、さらに家族の立場に立って検討する必然性が実感できなかった。そのため、追求課題を設定したものの、子どもにとって自分の工夫の問題点と家族とのかわりから検討しようとする強い問いにはならず、漠然とした追求意識となってしまった。

この2つの検討を通して、良美さんの視点の選択と工夫の検討は、以下のように深まりを見せた。

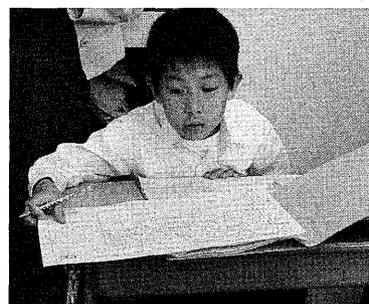
1 回目の検討

<p>選択した視点 〈便利さ〉 工夫：布が濃いピンク色だから濃いピンクのフェルトをきんちゃくの内側にポケットとしてつけると便利。布は薄いから、つけても邪魔にはならない。</p>	<p>選択した視点 〈見た目〉 工夫：白くて太いひもを使う。細いひもをつけて引っ張ると上の部分がすごくぐしゃぐしゃな感じになるから、太いひもを使うといいと思う。</p>	<p>選択した視点 〈見た目〉 工夫：花柄の布なので、花柄のリボンを外側から見て縫い目が目立つところにつけるときれいで縫い目が見えなくて使う人が恥ずかしくない。</p>
--	--	--

2 回目の検討

<p>選択した視点 〈家族の気持ち〉 工夫：布から糸が<u>出ていると恥ずかしいから、その糸を切る。そうするとはずかしくない。</u></p>	<p>選択した視点〈家族の気持ち〉 工夫：縫うところや縫う<u>大きさをはっきりさせる。そのため、チャコペンで印をつける。布に合った色の糸を使うと目立たなくていい。</u></p>	<p>選択した視点〈使いやすさ〉 工夫：縫い目を細かくする。そうすると隙間がなくなると、小さなものが落ちなくなるから、<u>安心できる。</u></p>	<p>選択した視点 〈生活の仕方〉 工夫：きんちゃくの大きさを大きくする。<u>私の家は書類みたいなのがたくさんあるから、それを入れそうだと予想できる。なので、きんちゃくをなるべく大きくする。</u></p>
---	--	--	--

この二つを比較すると、1回目より2回目の方が、下線部分で、家族の生活を考えた検討になっている。このことから、視点が明確になった後、さらに家族の立場を考えて検討することは有効であると言える。和夫さんは、「使いやすさの工夫では、大きさとお父さんの持ちやすさを考えて、ひもの長さを変える。丈夫さの工夫は、同じところを何回も縫ったり、並縫いをもう一度したりして、頑丈にする。便利さは、ポケットをつけることと、使いやすさと同じように、ひもの長さを変える。お父さんは仕事るとき以外のかばんを持たないし、手で持つのは大変なので、手で下げたりベルトにつけたりできるようにしたいから。」と、工夫の検討を振り返った。これは、使う家族の立場に立って検討した姿である。2回目の工夫の検討をする和夫さん



(3) 実践をふりかえろう

作品を完成させ、家族に渡して使ってもらった後、ポートフォリオをもとに、学級全体で実践を振り返った。家族に使ってもらったことについて、和夫さんは、「お母さんのためのきんちゃく袋をきれいに作ることができた。今まで、針と糸を使うお母さんの気持ちを考えたりすることなどなかったけれど、このきんちゃくに気持ちを込めて作って、お母さんの気持ちもわかってきたのがよかった。」と発言した。

良美さんは、自分自身を振り返って、「全然できなかった針と糸を使うことができるようになったし、お父さんやお母さんがどんな生活の仕方をしているか、今まで考えたことがなかったけれど、しっかり考えられてよかった。」と発言した。学習した内容を自分の家族のために生かせることや、それに対する家族の反応に満足し、さらに、学習を通して家族を見つめられるようになった自分を実感する姿である。

Ⅲ 成果と課題

(1) 「更新」「再構成」を図り納得のいくわかりを生む学び具現のための学習過程と働きかけについて

課題 家族の立場から考えた視点で検討するための問いの明確化

子どもにとって、本單元における小物制作がそもそも家族のために考えて始まっているため、子どもが自分の立場にたって考えた視点と家族の立場にたって考える視点は、重なっていたと考えられる。そのため、家族の立場に立った視点をはっきりさせる必然が子どもの中になく、したがって、子どもの問いもその方向になかった。家族の立場に立った視点からも検討するならば、自分の立場から考えた視点からの検討だけでは不十分だということを実感させる必要があった。

成果 子どもが自分の工夫を検討する視点を顕在化したことで、子どもは、視点と自分や自分の家族の生活を関係づけ、判断することができた。

子どもは、「大事にしたいこと」として視点を顕在化させ、自分の工夫を検討・判断することができた。視点を顕在化させることで、自分が考える工夫を客観的に検討し、判断していく子どもの姿が見られた。

(2) 「更新」「再構成」を図る学びを具現するための働きかけについて

課題 顕在化した視点を使って子どもが個々に自分の工夫を検討・判断するときの個への支援

本單元では、顕在化した視点をもとに自分の小物への工夫を検討・判断する中で「家族のための価値ある小物を作るには、家族への思いが表れるように工夫して作ることが大切」という見方を「家族のための価値ある小物を作るには、家族の思いだけでなく家族の生活の仕方に合うように作ることが大切。」という見方に更新することを構想した。子どもの姿では、構想した更新に近い姿が見られたと考える。しかし、個への支援を行わなかったために、顕在化した視点から子どもが自分の見方を更新し工夫を再構成したきっかけが明確にならなかった。

(3) 評価法について

成果 ポートフォリオをもとに、子どもが単元を通しての自分の成長を実感する自己評価

ポートフォリオの蓄積と振り返りとを組み合わせる自己評価を行った。知識・技能、創造的な力、実践への意欲がどのように成長したかを、ポートフォリオをもとに振り返り、自己評価した。この自己評価から、子どもが自分の成長をどうとらえ、「家族とかかわりながら、よりよい生活者として実践をし続ける子ども」に向かって思考を高めたのかを見取ることができた。

<主な参考文献>

- 多々納道子・福田公子編著 2005 「教育実践力をつける家庭科教育法」 大学教育出版
永原 慶二著 2004 「苧麻・絹・木綿の社会史」 吉川弘文館
日本家庭科教育学会編 2007 「個人・家族・社会をつなぐ生活スキル」 ドメス出版